

すてきな暮らしを あなたに

暮らしの手帖社 社長

大橋 鎮子

聞き手：佐多 保彦 (株)東機貿代表取締役社長

佐多：『暮らしの手帖』は昭和23年の創刊以来、日本の戦後とともに、半世紀を歩んで来られました。まず、そこに流れる基本的な精神についてお聞かせいただけますか。

大橋：精神というほどのものはないんです。私は戦時中の女学生でした。防空壕の中で、戦争が終わったらどうやって生きていこうかと考えたとき、私だけでなく同年輩の女の人たちは皆、本来の勉強も満足にできなければ、お稽古ごとくも身につけられなかった、と思いました。戦争末期から出版関係の仕事をしていましたので、もし私が自分の知りたいことを活字にして印刷したら、皆さんはきっと喜んでくださるだろう……と考えました。その後、花森安治(※)さんという素晴らしい協力者に出会って、『暮らしの手帖』を創刊いたしました。そして、今もその時と少しも変わらぬ思いで雑誌を作り続けているというのが、ほんとのところですよ。

佐多：『暮らしの手帖』といえば、やはり“商品テスト”が有名です。

大橋：商品テストのきっかけは、新橋の焼け跡の闇市で会社用のミシンを買ったところ、これが動かなかったという“事件”です。その頃から市場にも商品がポツポツ出てきていましたが、まだ粗悪品を買わされることが非常に多かったのです。そこで、私達が先んじて商品を



おおはし・しずこ

1920年、東京生まれ。幼児期を北海道で過ごし、旧制東京府立第六高女卒。日本興業銀行、出版文化協会勤務などを経て、48年『暮らしの手帖』創刊と同時に社長就任、現在編集代表。

買い揃えて使ってみて、良し悪しをテストしようということが始まりました。それが昭和29年。自然なかたちで出発したのですが、これがずいぶん皆さんのお役に立ちました。

佐多：メーカーの苦言はありませんでしたか。

大橋：ほとんどありません。が、ひとつお話ししましょう。当時珍しい「どびんと茶碗のセット」。西洋風のデザインが目を引き、買って使ってみたら、口からお茶が漏るんです。誌上で「困る」と書きましたら、産地からそのメーカーの方が抗議にみえました。よく聞いてみると、その工場のテストでは水を使っていたのですが、私たちはお湯でテストいたしました。水とお湯とは表面張力が違います。家庭では、どびんにお湯を入れますから、水でのテストはまちがいだったのです。

クレームがなかったのは、私たちのテストが、あくまで実際に則したものでしたから、メーカーの方にも納得していただけたのだと思います。

花森は「メーカーが良いものさえつくれば、商品テストはいらない。テストは、消費者教育のためではなくて、メーカーのためにやるのだ」と言っていました。たとえば、あるメーカーが自分のところの製品のテスト結果をもっとくわしく知りたいと来られれば、そのメーカーのものだけは全部お知らせし、助言もします。その結果、もし改善していただければ、次にまた誌面でとりあげて、この点がよくなったと発表してきました。

こういう「メーカーといっしょに商品を良くしていこう」



VITALITE

インタビュー

という私たちの考えが、世の中に広く受け入れられていたのだと思います。

佐多：日本には消費者運動が根付かないなどと言われます。米国でラルフ・ネーダーが消費者運動の旗手として出てきたのは60年代でしたし、我国でPL法（欠陥商品に対するメーカーの製造責任）が認知されるのはやっと95年からということを考えますと、『暮らしの手帖』のあれほどの影響力が、なぜ政治的な力になり得なかったのかという気がします……。

大橋：私たちは、ターゲットを家庭の中だけに絞っています。底辺にはもちろん社会観が流れていますが、誌面には出しません。連載で先生方がご意見を盛り込まれたり、いろいろな記事のはしばしに現れたり、また花森も政治には関わらないと言いながら相当厳しいことを書いていたこともあります。でも、私は「幸せに暮らす」ということ一本にしていまいりました。社会や政治への提言は、新聞やその他の雑誌がしていらいっしやいますし、雑誌にはそれぞれの守るべき分野がありますから。

佐多：そうですか。ところで、『暮らしの手帖』では医学記事も柱のひとつですね。

大橋：それは私の強い希望でした。実は私が小学校1年生の時、父が肺結核になりました。当時はお薬もなく、“牛の生き血”を飲ませることが最上の滋養、などと言われていました。父が血を吐き、体温計を折る。枕元で母が泣く。療養所を求めて、伊東、鎌倉、大森などを転々とししました。父が亡くなるまでの5年間、家族で看病に明け暮れる経験をしたことで、私は家の中に病人がいることは何よりも不幸なことと、子どものときから痛感したのです。家族に病人を出さないためにも、医学や医療の知識を提供する仕事をどうしてもやりたい、と私は思っていました。やがて念願かなって、昭和30年『診察室での会話・肝臓について』がスタートし、以来39年、一回も休まずに続けています。これは、もし家族が病気になったら何が聞きたいか、また、自分が病人なら何が知りたいかとの想定で、医師への質問と回答の形式をとっています。

佐多：医学記事も、視点は“家庭の幸せ”。実に一貫していますね。

大橋：編集方針については、最近少し時代遅れになってきているのではないかという意見もあります。では、子供の教育を例にとりますと、今のお母様方は塾や学



校に関心が高いですね。しかし考えてみれば、子供を良い子にしたい、幸せにしたい、との親の願いは今も昔も変わりがありません。暮らしは変わっているようで案外変わっていません。そして、家庭にお役に立つ雑誌をつくるという私たちの姿勢にも変わりはありません。

佐多：確かに、日本の家庭は父親がでたらめでも、母親がしっかりしていれば大丈夫です（笑）。

では最後に、この春お受けになった東京都文化賞について伺います。受賞理由は「戦後の一般の人の暮らしを豊かにした」ということですね。おめでとうございます。

大橋：ありがとうございます。賞状には「暮らしの手帖社を設立し、雑誌《暮らしの手帖》を今日まで作りつづけてきた努力」と、「人々の出会いや、日々の暮らしを美しい文体でつづったエッセイ『すてきなあなたに』は読者に静かな共感と深い感動を呼び起こした」とあり、うれし涙がこぼれました。

私は編集者として、心あたたまできごとやハッとさせられること、すてきな光景に会って胸が一杯になったり、生きていてよかったと思う、そんな経験を皆さんにお知らせしたくて、エッセイを書いています。人は一生懸命に努力すれば、きっと何でもよくなっていくのではないのでしょうか。

※花森安治さん（1911～78）『暮らしの手帖』創刊より編集長をつとめた。